

1999年2月22日発行

新宿

ダンボール村通信

第13・5号
越年越冬総特集

特別号



2・7からの出発か？2・7への後退か？ ～新宿連絡会
こんなにも仲間がふえたよ 新宿越年闘争総括～新宿連絡会
都市の果てから エサとりキャラバン～木暮茂夫
旅路からの報告、2・7一周忌を終えて～笠井和明

編集前記

予告では本号がダンボール村通信最終号となる筈でしたが、編集部一同なんだか名残惜しくて（本当は忙しくて）、最終号の間に13・5号「特別号」を挟む事と相成りました（ごめんなさい）。4月発行予定の14号が「ダンボール村通信」の花道を飾る本当の最終号となります。特集、写真館、論文も最終号目指し、企画執筆陣に鞭打ち邁進中ですので乞うご期待を！また、6月から発行予定の新雑誌は、路上に花開く文化を求めてあまり深刻ぶらずに肩肘はらない企画を練り始めている段階であります。問題だ、問題だ、と知ったかぶりをして叫んだ所で、それ以上の日常の中におっちゃんやおばちゃんらは地道に日々の暮らしをまっとうしようとしています。そこにこそ光を当てずにどこに当てろと言うのでしょうか？言葉を発する義務をもった者は言葉の空しさを常に感じながら言葉を発し続けなければなりません。言葉は現実の前では常に無力であり「のうがき」に過ぎません。せめて、その「のうがき屋」であることを自覚しながら、情けなく、卑下しながら、現実に近いこうとするしか我らには何も出来ません。「ホームレス問題とは云々」などと偉そうに言い、書く連中は糞たれ！日常の中の日常を見ろ！路上に咲く花を見ろ！路上に宿る歴史を見ろ！路上に有る人間を見ろ！だ！そこから始まり、そこに終わる現実の憂いを知れ！その位の想像力がなければお終いだと、我ら一同「のうがき屋」に過ぎぬが誇りを持って言い得ます。無力さを武器に我らは書き続けます、路上の芽を発信し続けます。それは、人間としての可能性と絶望を路上に見てしまった我らの責務と感じながら…。

(か)

表紙写真 (文中写真も)

木暮茂夫

2・7からの出発か？ 2・7への後退か？

新宿連絡会

～2

98-99 新宿越年活動記録

(作成) 新宿連絡会医療班

～10

こんなにも仲間がふえたよ 第5回新宿越年闘争総括

新宿連絡会

～11

もう一つの越冬

都市の果てから…エサとりキャラバン

木暮茂夫

～15

越冬ピラ

～17

旅路からの報告 2・7一周忌を終えて

笠井和明

～18

2・7からの出発か？

2・7への後退か？

(1998年12月23日新宿越年・越冬闘争支援連帯、越年闘争突入集会基調・新宿連絡会)

1、はじめに

『我々は未来を語ることなく、常に現状の課題とのたたかいを強いられて来た。94年2月の強制排除から開始された反撃のたたかいは、反撃の芽をつかむ前に、新たな強制排除を準備され、96年1月の強制排除へと至った。そして、本年の攻防もまた、同じ構造の中、我々は強制排除を阻止することに没頭した。大衆行動の具体的な行動を通して仲間を組織する我々のスタイルもまたこの休む間もない闘争漬けの毎日から編み出したものであるし、新宿闘争の社会的な評価もまた連続した大衆行動から生み出されている。無論、未来を語ろうとしたスローガンはある。が、それは、強制排除とのたたかいの渦中常に置き忘れられ、振り替えることもされなかった。

本年仲間のたたかいにより作り出した東京都との力関係、そして強制排除の封殺状況がいつまでもつものか、我々にはとうてい判り得ない。微妙なバランスの上に我々のダンボールハウスは辛うじて平行を保っているに過ぎないからだ。が、我々がここで息を抜くならば、このバランス状態もいずれは傾き始めることになるだろう。(略)

我々には未来を語り、未来に責任を持つことが必要だ。過渡期としての路上からの発展の経路を我々は我々の言葉で語り始めなければならないし、そのためのたたかいに立ちあがらなければならない。それは、行政や学者が語るのではなく、我々運動体こそが責任を持って語れることであろう。

越年・越冬闘争がスケジュール闘争としてこなし終わったなら、我々は同じことを繰り返さざるを得ない。本越冬以降のたたかいが消耗戦のたたかいとならないためにも、我々はこの地下の路上から天空へと手を差し延べていきたい。

我々が出会った野宿者は決して団結して終わる野宿者ではない。』(第4回新宿越年・越冬闘争支援連帯集会基調より)

果たして、我々はこの一年、路上の未来を語り、過渡期としての路上からの発展の経路を指し示し、実践して来ただろうか？

「分散」

今年一年は、悲しいかなこの言葉で全てが言い表される。雪降る日の西口地下以外で分散した仲間の野垂れ死、2・7火災による4名の仲間の死と西口地下広場コミュニティの分散、暫定センターへの分散と、宿泊所や野宿に戻る者の分散、残った仲間の野宿地域の分散、活動家の分散、支援者の分散、意識の分散……。

それを統一させる試みは、全て試行錯誤の途上にある。

「たたかっていればいい」この基準であるならば、我々が多いにたたかい、団結を作りだして来た

言えよう。が、我々の世界ではどのような発展の経路でたか、何を勝ち取り、そこでどのような質の団結を作りだして行ったのが全てである。

我々は常に発展の芽はつかむ。が、それを本当に発展させた事はない。2・14自主退去決断で勝ち取った暫定センターも、寮内改善要求委員会も、結局は発展の軌道には乗らず、中途半端なものに成り下がった。「たかかっていればいい」という卑しい自己確認と、それに煽びた自然発生性に我々は常に凌駕され続けている。

どのように必要な物をどのように具体的に勝ち取って行くのか？団結というその場の雰囲気をもどのようにして一人一人の権利意識へと結びつけて行くのか？その一人一人の権利意識をもどのように組織へと物化して行くのか？それすら自覚されない運動は、唯「たかかった」という自己確認で終始し、気がつけば何も残らない。

西口地下のダンボールハウス群が中央公園の小さなテント村に転化したただけなら、我々は何も変わってはいないどころか、後退の道を辿っているだけである。

行政施策うんぬんという話してではない。我々がもう一つの拠点と位置付けた暫定センターが施策の未完成品のようになったのも、結局我々の団結というものが、まさに雰囲気だけの団結に化していた証拠である。「困った時はお互い様」を契機とする仲間のつながりの質が、そのレベルに押しとどまっていた証拠である。さすれば、新宿連絡会とは仲間にとって、言うなれば、ちょっと過激なボランティア団体でしかない。

いくら切開をしても膿が出ないのなら、治療を中断しその状態に止まるしかない。それが嫌なら生まれ変わるしかない。

我が運動体の実態は実に深刻である。

「2・7からの発展か、2・7への後退か」という問題意識がない限り、我々の運動は例え本格センターが出来たとしても一歩たりとも前には進まないだろう。

2、インフォメを失ったことの意味（2・7の意味）

『ダンボール村の焼失と4名の仲間の死は、いかなる結果を運動側にもたらしたのだろうか？我々は2・7の総括を2・14自主退去として具現化しながら、自立支援センターの設置をその運動の柱として来た。不法占拠状態の維持過程における運動の目的意識性の欠如が内的な腐敗構造を放置し、不法占拠状態を我々の自立支援センターに転化、発展させることなく、我がダンボール村の運命は悲劇的な末路をさらした。我々は、この事態を思想的に受け止め、外部のもの誰も想像しなかった自主退去という、運動の全身全霊をかけた一気加勢の転換を成し遂げた。それが、我々が見殺しにした4名の仲間への我々のせめてもの償いだった筈である。突拍子もない自主退去は他の運動関係者からは支持されなかった。我々は孤立しつつも、しかし、その確信をもとに、野宿者運動の未来は自立支援センターにあると言い続けてきた。

都区路上生活者対策に対する距離感、この事態の中で必然変わらざるを得なかった。我々がとった戦術は、我々の自前の力のなさ、力量不足が故に引き起こした事態を、都区方針に乘っかりながら克服、昇華させていく戦略であった。4名の仲間の死を無駄にしないこととは、他の仲間の現状課題を、対策

の枠組みの中で一定解決し、そして、新宿以外の仲間も含めたインフォメ同様に不法占拠をせざるを得ない人々の現状課題を対策の枠組みの拡充として一定解決することにあつた。

「団結して終わる主体ではない」我々は、団結という目にみえぬ抽象概念ではなく、対策という具体性をこそ求めた。すなわち、ものを取ることに終始した。暫定センターはまちがいなく取った。が、どうやら、そこまでである。もちろん、運動は続ける。2・7がある限り我々は我々の方針を突き進まなければならない。が、一気加勢のドラマは、ここに来て息切れをしてきたのも事実である。運動は直線的に流れないよう、最初の苦境の峠越えの時点に差し掛かってきているようにも思える。そのリタルダンドが総休止となるのか否かは、我々の総括如何である。

ここに来て、インフォメを失った意味を我々は深く考えざるを得ない。何故、インフォメが焼失したのか。一言で言えば、戦略なき運動の目的意識性の欠如である。ここに我々は自立支援センターを打ち立てられなかった。拠点が、居住区が、寄せ場があることに安住をしていた。路上だからという意味ではもちろんない。発展の経路を見失うという事は、いかなることを引き起こすのかと言うすこぶる明解な実例を我々は経験した。そう我々は総括したつもりである。

が、今の我々は、発展の経路について、そう深刻に悩んではいない。目的意識もはっきりとはしていない。そこに集中すら出来ない主体である。連絡会しかり、全都実などもっとしかり。ぼっかりと心に空いたインフォメがない空虚を皆もちながらも、暫定の仲間に対しても、新宿の、全都の仲間に対しても、さほど興味もなく、どうすべきかの具体的な方針もなく、悪くいえばこなしの運動を、対象をお客さんにした運動を、スケジュール的にこなしているだけである。スケジュール闘争しか出来ずに大衆運動云々言っている限り、我々は運動の基盤すら失うことになるだろう。

2・14を決断し、一糸乱れずにそれを実現させた我々が、今、何故、それを維持出来ないのだろうか？自立支援センター設置問題の混迷は、我々の問題でもあるのである。』（98年9・15連絡会会議レジュメより）

我々は本年中途において事務局内部でこう総括をした。が、8月、9月の集中論議もまた活性化されることなく、その後も運動のために運動をやる運動方針しか打ち立てられずにいる。これは何よりも連絡会にとって2・7が真に総括されていない証左であろう。活動家層も連絡会に結集する労働者層もいまだ2・7を直視することを避け、それでもなおかつ発展の経路を語ることなく、現場の忙しさや課題に身を浸しているだけである。

無論、我々にとって2・7を真に論議することはあまりにも苦しい。出来ればあの地獄絵を再び思いだしたくないからである。未だ我々は「泣き続け」ている状態なのかも知れない。が、悲劇を悲劇として認識したい心情に止まっている限りは、新たな前進の芽はつかみ得ない。未来を語れない主体を破棄し、未来に関する論議を活性化させない限り、我々主体の未来もなくなるだろう。再び2・7のような事態を招かないよう、2・7からの飛躍が真に問われているのであり、それを検証する場が我々の主体的な越冬闘争の獲得目標である。

3、本98年の具体的な成果と総括。

主体的な総括とは別に、新宿の運動は弛みなく流れている。底辺下層に封じこめられ、そこでしか生きられない存在に固定化されようとしている仲間がいる限り、運動の流れを我々の手で止める訳には

いかないからだ。

本年、我々は2・7からの飛躍として、2・14自主退去を意識的に成し遂げ、172名分の自立支援センター暫定実施を文字通り区内二か所に勝ち取った。これが本年の具体的な成果のひとつ目である。少なくとも我々は自主退去の決断の中で、ただチリジリに排除されるのではなく、希望する仲間の長期にわたる「就労自立」への機会を西口地下広場にいた仲間達に平等に分け与えることが出来た。

そして、仲間の団結の質を意識的に全都へと広げ、野宿を余儀なくされた仲間達の共通の課題を打ち立て、統一と団結を旗印に全都野宿者運動展開に着手した。組織的には全都実がその成果であり、また、全都署名、二度にわたる都庁デモ、二度にわたる団結集会、そして二度にわたる東京都福祉局との団体交渉の中で引き出した「年度内本格センター開設」確約こそその本年のたたかいによって勝ち取った二つめの目に見える成果である。

新宿、全都の運動の流れは、一時期の集住拠点防衛と撤去反対運動から生活、就労を求める広範な政策要求運動へと大胆に転換されて来た。これが、我々が今年一年作り出して来た基本的な流れでもある。

その中で我々は過ちを繰り返して来たのである。とりわけ施策活用路線は寮内工作の失敗などに規定され就労支援強化を引き出せず、寮生への不安と困窮を強い、相次ぐ退寮者を発生させ、また暫定施設閉鎖後も有効な手立てが打てず宿泊援助事業へと中途半端な形で引き継がれてしまっている。また、全都実運動も全都的な大衆基盤をつかみながらも、実にもったいないことにスケジュール闘争しか打てない主体的な限界を吐露させ、暫定から本格への橋渡しが完全に失敗に終り、冬期がその対策の狭間に位置するという最悪の流れを余儀なくされている。

『無論、我々がやって来たことが無駄であったと言っている訳ではない。これからの課題がより鮮明になったと言っているいだらう。只それだけである。』

連絡会の四年間がそうであったように、紆余曲折は運動にはつきものである。これから、我々がしっかりとしさえすれば、これまでの汚点は必ずぬぐいさられる。肝心なのは、總括を共有する事と、共に実践することのみである。

但し、我々の運動が、多くの仲間の期待に背いてしまった事は事実であり、その点は率直に反省すべきであろう。失敗は失敗としてつつみかくさず仲間に明らかにして行かねばならない。例え、それが辛かろうともである。運動への幻滅を引き出してしまったら、それこそ最悪の事態であり、そうならないためにも、我々がたたかっていることを自負するのではなく、たたかっている事を恥なければならぬ事もある。が、野宿のままの現状維持には何の展望もない。だから我々は未だ「泣きながら進まねば」ならないのである。

不備ある対策を我々は引き出し、それを寮内闘争で改善し抜き「俺たちの対策」に転化し、それを部分的、地域的な対策ではなく、全都的な「誰でも入れる」対策へと更に深化しようとした、我々の試みはとりあえず中途に終わった。が、我々の志向性は、この失敗に挫けることなく、ますますそれへと研ぎ覚まされて来ていることも事実である。今後、対策上の紆余曲折があったとしても、我々の志向性は紆余曲折することはない。これが、4名の仲間の死を無駄にしない我々の思想であるし、それを経験した我々の一人一人がレベルの違いはあれこの半年身に付けてきたと信じたい。主体的な成果は、まさにそのことである。例え、我々と共に歩んで来なかった評論家や学者の活動家の幾多の批判があろうとも、我々には「これだ!」という確信はあるし、空論的批判を一喝して打ち砕くだけの烈火とした腫がある。

理論的に展開できない我々の団結という武器は、新宿連絡会組織を、しかし、今後鍛えあげていくことだろう。実態をもたない批判などくそ食らえである。我々是我々の実地の確信を誇りに思い進むだけである。(略)』(98年9・15連絡会会議レジュメより)

路線的には最も困難な状態からの転換と飛躍を我々はかなり大胆に成し遂げた。それ以外の道がなかったとは言え、ダンボール村=連絡会運動解消を拒否し、ダンボール村の解消を対策推進の転進として位置付け、現場運動の質をより広がりをもったものへと発展させ得、運動を継承発展させて来たたかいは正当に評価されて良いと考える。(略)

幹と、さし進むべき方角を我々はこの一年、確かに育てて来た。我々の総括はその点での総括ではない。その実行力、それを担う主体の思想性が足らずに実践的、戦術的な失敗を余儀なくされただけの話である。問題は発想の硬直化と統一された組織的な実行力だけであろう。

自立支援センターと言うと、それを戦略観として見ずに、運動全ての目標へとすりかえてしまう発想、寮などへ入ってしまうことによって関係を維持発展させようという発想がとだえてしまう悪しき路上至上主義、より具体性をもつての支援が出来ない、精神的な支援をしていれば事足りると考える傾向、運動のスケジュール主義、自然発生性への拝跪などが、今年の運動の中で発生し、そのつど総括を繰り返してきた事柄である。

これらが総括されなければもちろん組織的な実行力もまたおぼつかない。この一年の成果と総括が問われる越冬闘争にしなければ、それこそ最悪の越冬闘争になる。現場の課題に振り回されがちな越冬闘争であるが、それだけでは我々の越冬闘争は成立はしない。

4、第5回越年越冬闘争の位置、

無論、我々の越冬闘争は単なる季節行事ではない。我々が培ってきた基本的な流れの中にしかと位置付けるべき越冬であり、なによりも、野宿を余儀なくされた仲間が、その強いられた現状を破棄する運動の発展の上に養える越冬闘争でなければならない。だから、冬は防衛戦として規定する必要もまたない。越冬闘争の中の団結を規定のドグマで封殺してはならないのである。

具体的に言えば自立支援センターを求めるたたかい、生活保護を求めるたたかい、排除を許さないたたかいは、この越冬闘争の中に必ずその発展の芽は発芽されるということであり、その契機を見逃すことは許されることではない。いかに我々が課題としている問題を有利に進めるかを常に考え、そのためにあらゆる躊躇を封じ、仲間の怒りに依拠し、運動を発展させて行くのか？我々はすでに失敗はいくらでもした。が、実践せぬ者には失敗もまた自覚できはしない。肝心なのは二度と同じ失敗をしないことだけである。その蓄積は我々には多いにある筈である。

単なる防衛に徹しない事こそ、我々の越冬闘争の真価である。発想をより柔軟にかつ大胆にし、ありとあらゆる手段を行使しながら、我々の運動を前進させて行こう。

インフォメ前拠点がない事など、その観点に立つならある意味ではどうでも良いことである。また過去の越冬にこだわることも必要がない。我々是我々の運動、そしてなによりも仲間の命を守るため、仲間の命を守る共同行動の中で培われる団結を発展させるため、必要な事をやるだけのことである。必要だと判断したら、それに拘り、とことんそれをやり抜く。実は我々に欠けている点こそそれである。こ

うすべきだ、ああすべきだ、とあれやこれやを言う前に、自分で責任をもってやる。この気概に支えられた運動実態を我々は再度構築しなおす必要がある。初心に戻った越冬をと言うのはまさにその事である。我々は、新宿の地において、誰もやった事の無い、考えてもいなかった事をやってしまった運動団体である。これはまさに、仲間の利益に必要だからこそ、力をふり絞ってやり抜いただけの話である。

(略) 本越冬もその当時かなり近い状況である。何故なら中央公園越冬闘争など具体的なモデルはどこにもないからである。が、我々はそんな事には動揺はしない。冬が寒いのは当たり前、冬が仲間の命を威嚇する季節であることも承知の上、冬に何をなさねばならないかなど、言われなくとも我々の体に染み付いている。それを実践するだけの事である。

「仲間の命を仲間の力で守る」

越冬の原点とはこの点だけである。言うまでもないが、それは行政の越冬対策事業に仲間を流し込むことではないし、医療従事者などを拠点に配置して路上救急体制を強固にすることでもない。もちろん、行政施策の活用、医療従事者などとの協力は必須である。が、それに頼り仲間の命を守ってもらう事が、越冬闘争の目的ではない。少ないハード面での体制を有効に利用、活用できるよう、そして、活用せぬとも仲間の関係性の中でそれを克服していく手段を作り出す事こそ、すなわち「仲間の力」を発揮させる事こそ、越冬闘争の最大の課題である。この「仲間の力」ないところで、いかに行政施策がかぶさっても、また、医療従事者が手を差し延べても、それは仲間全体の力には転化して行かない。越冬闘争こそ、当事者の生き抜く力をお客さんにしてはならない場である。それを主人公にさせて行く手段こそ問われている。

仲間の共同した力と関係こそ、冬を乗り越える最大の武器である。この点をこそ、我々はこの冬、力よく発揮させて行く。

5、中央公園越冬闘争について

インフォメを失った代わりに、我々は全都越冬という大きな武器を勝ち取ってきた。新宿の越冬闘争もまた全都越冬の枠内において、とりわけ西部圏において分散と孤独を余儀なくされている仲間の拠点として位置付けられる。各地の仲間が集まり、共同炊事、配食をして行く場のみならず、「パトロールで結ぶ」出撃拠点として新宿の越冬拠点（中央公園）の位置はある。

我々は、仲間の共同した力と関係を発揮させる手段として「共同炊事」と「パトロール」をこの越冬期の大きな二大柱として行く。昼は「おかず作りの共同炊事」（山谷ほど規模が大きくなり、火もガスコンロしかないが、それでもまさに共同鍋の質をもった手作りの）をまさに全体の力でやり抜き（飯は山谷で炊く）、夜は「パトロール」を医療本部と結びつけながら、全体の力で新宿全地域、および池袋、東京・銀座・日比谷公園に繰り出して行く。

本年の越冬闘争の基本的な形は、まさにこの形である。例年のような24時間拠点体制は組まない。拠点は必要な時に集中し人が集まれる場所の位置しかもたせない。時間帯で言えば、昼から夜七時半までである。

夜は、我々は仲間とともに分散し、新宿、そして全都パトロールに繰り出して行く。

この基本的な活動スタイルの中で、もっとも肝心な事は、新しい仲間のこの活動への参加である。そのために、参加できる手段は非効率の多いだろうが多く準備しておく必要がある。旧来の仲間がそそくさと

やる、あるいは支援がテキパキとやってしまう、というのは、新しく参加する仲間の能動性を奪って行く結果となる。守らなければならない時間は配食の夜7時だけであり、あとの時間配分などは、現状に合わせて考えれば良いのである。いかに時間がかかろうとも我々は多くの仲間の手を借りた、まさに多くの仲間が充実感を得られるような仲間による手作りの越年闘争を編み出して行きたい。混沌とした無秩序さこそ仲間の可能性の宝庫である。時間に区切った、整理され、仲間は並んで飯を食うだけという形態こそ避けるべき醜悪な姿である。活動家諸君や支援者は「何かやりたい」という仲間の視線に気付いたら、率先してなんでもいいから仕事を割り振るようにしてもらいたい。また、指示などなくたってゴミ拾いでも何でもいから自発的、率先してやって行こう。間違っても、それに文句などつけないように。

パトロールもまた新しい仲間呼びかけ、自分の寝場所まででもいいから、仲間と一緒に回ることが肝心である。初心者はピラ撒きパトでも、お喋りパトでもなんでも良い。パトロールの観点を医療だけ（病人探し）に限定せず（もちろん責任者はその観点をもたなければならないが）、もっと自由に夜回りを組織してもらいたい。そのために、事前の班ごとのミーティング、コースや集約地点の確認などはしっかりと行なって行こう。

他方で医療本部については、ここは医療従事者支援者や医療班などプロの牙城であり、素人の溜まり場には絶対にしない事。医療班は体制をしっかりと組み、緊急対応や、医療相談などで仲間との医療を通じた回路を確実に作って行く。もちろん、ここにも仲間の力は必要であるが、こと医療対応については手元の位置であり、間違ってもここで主人公になって素人判断などをしないように。人の命にかかわる部署であることを常に認識しておく必要がある。

共同炊事、パトロールを仲間の活動の場として構築して行き、その前提の上で医療対応が必要な仲間に対する医療本部との回路を間違いなく作ることによって越年の体制は形づくられる。もちろん自由な雰囲気やベースをベースにしながらも、組織的にはその責任体制は作って行く。仲間の能動性を発揮できる手段を多く作ることによって、我々の溜まり場の雰囲気もまた活気を帯びたものになるだろう。そこに作られる「団結」こそ、我々が目指すべき、またそこからの発展の可能性ある「団結」である。上からの集会によって作られる「団結」こそ破棄し、年末のイベントや、新年の餅つき大会もまた、その「団結」を軸に共に楽しめれば良いと考えている。だから、基本活動以外のものは、全て予定調和である。

仲間と共に作り、仲間の力で仲間の命を守る越年闘争を！

全都越年闘争の大衆的集約点である1・15山谷集会デモへ！

6、越冬後段闘争について、そしてまとめ。

昨年がそうであったよう、越年闘争の質が季節的には最も厳しい越冬後段を規定する。越年闘争で培うであろう仲間のつながり、団結を、できるだけ分断せずに闘争方針、そして日常活動の中で発展させて行くこと。このことこそ越年闘争後段では試されて行く。旧来のように共にたたかった仲間が越年闘争が終り飯場に入るとい根拠は年々薄くなっており、野宿のまま固定化されていく傾向が強まっている。それだけに越冬後段闘争から来春にかけての活動の中、新たに活動に参加してくれた仲間をこぼすことなく、共に運動を担って行く方向性を作らなければならない。

とりわけ、研ぎ澄まさないといけないのは、「年度内センター開設」確約をどう運動に有利に利用

し、出来るだけ早く大衆的な力でセンターを実現させて行くかという全都方針である。また、渋谷問題に象徴される強制排除に抗するたたかい（11・27反動高裁判決を受け、また名古屋、大阪に続いて画策されるであろう行政代執行法を使つての排除をいかに封殺するのか）、越冬対策自身のほころびが見え始めた中での生活保護獲得のたたかい、これら全都実運動の三本柱をどう野宿者の利益として運動的に組み立て、具体的な成果として仲間還元させて行くのかが問われてくる。無論、運動は運動主体の現状に規定される。が、故にその歩みは一直線ではないかも知れないが、少なくとも運動の戦略と方針は明確かつ早急に打ち立てるべきであろう。

今日の野宿者の急増は、規定の路上対策を崩壊させるに十分な現象である。この自然発生的な事態に手をこまねいていると、かつて（また現在）の山谷センター法外保護の固定化のような、まったく手のうちようのない事態を招いてしまう危惧がある。規定の路上対策が崩壊しつつある危機感を必ずや、本越冬対策の中では行政サイドに認識させる必要がある。路上問題については、すでに国政レベルの論議にまで突入しており、この仲間達が余儀なくされつつも自らの力で作りだして来た「社会問題」を、いかに我々に有利に展開せしめるかである。

我々は路上から脱する全うな権利を社会全般に求めて行く。生活と就労を社会全般に求めて行く。それは、単に行政施策という面のみならず、それをも含んだ社会に対してであり、また、その社会の一員でもある我々の義務としてでもある。この観点における野宿者運動は特殊ホームレス問題としてのではなく、底辺下層労働者を取り巻く社会的環境を改善もしくは打破していく運動としての発展の経路を辿り、それは強いては労働者の諸権利を求める運動へと演繹される質をもつ。もちろん、そういう思考をもった人々は極めて少ない。そこに横たわる分断、差別をも撃ち抜くパワーを我々がもって始めて、そのことを堂々と語れる主体へと我々は発展するのである。そして、そのためにも我々は我々の野宿者運動を中途に終わらせる訳にはいかない。

確かに路上からの発展の経路は、未だに試行錯誤の段階である。主体的な問題も極めて大きい。が、我々に仲間の声を聞き取る耳がある限り、仲間の叫びを受け止める心がある限り、そして、ほんのちょっとした想像力と勇気がある限り、この問題は必ずやクリアできると信じている。

越年闘争を越年闘争として終わらせず、越冬後段闘争へ越年闘争そのものの質を引き継いで行こう。運動を情性に終わらせず、未来という戦略をもち、現状打破という戦術をもち、我々は本越冬闘争を力の限りでたたかい抜く。

最後に再び言おう。

越年・越冬闘争がスケジュール闘争としてこなし終わったなら、我々は同じことを繰り返さざるを得ない。本越冬以降のたたかいが消耗戦のたたかいとならないためにも、我々はこの地下の路上から天空へと手を差し延べていきたい。

我々が出会った野宿者は決して団結して終わる野宿者ではない！

二・七一周年で我々が殺し去った仲間自信をもってこの一年を報告できるよう！

(丁)

98-99 新宿越年活動記録 (作成・新宿連絡会医療班)

	12/27	12/28	12/29	12/30	12/31	'99 1/1	1/2	1/3	合計/平均
炊き出し配食数	600	700	700	700	700	700	700	700	
野宿者数									
新宿	602	528	459	518	480	543	585	544	532
高田馬場	219	214	216	221	204	215	223	224	217
テント宿泊者	0	3	0	3	2	3	4	4	19
救急搬送									
テント	0	0	0	0	0	1	2	0	3
路上	0	1	0	1	0	2	0	0	4
医療相談									
参加者	6	2	3	14	2	4	3	12	46
受診者		4	3	58	26	28	10	53	182
疾患									
感冒・気管支炎		2	2	46	20	24	7	29	130(71%)
下痢・腹痛		1	1	3	2	1			8
血便								2	2
外傷				1	3		2	3	9
腰痛・関節痛				3	1	1	1	7	13
眼疾患						1		2	3
皮膚疾患				2		1		3	6
その他		1		3				7	11
紹介状		1		5	2	1	3	18	30
死亡				1 (池袋)					1



こんなにも 仲間が ふえたよ

第5回新宿越年闘争総括

新宿連絡会

インフォメ前亡き後の屋外中央公園ポケットパークにおける初の新宿越年闘争は天気の崩れもなく、また寒さも例年並ということもあり、拠点を守るまるまる1週間維持し抜ける条件に満たされ、まずは順調に貫徹されたと言えよう。

今回の越年闘争は「仲間の命は仲間自身の力で守る」のスローガンを全面に出し、共同炊事とパトロールを昼、夜の仲間が全面的に担う共同作業の2大柱に据えた、よりオーソドックスな形態で仲間自身の力が発揮しうる仲間の手作りの年越しを企画した。

この観点からの本、越年闘争は我々の初心をよびもどすに足りる大きな成果と感銘を刻印させる越年闘争であったと総括する。毎日11時半の結集（実際は早朝からポケットパークに集まり）には毎回50から70名近い仲間が集まり、共同作業の配置につき作業を担って行く姿に象徴されるよう、また、池袋や新宿で始めて年を越す仲間や今まで参加しなかつ

た仲間も含めた多くの仲間に支えられたパトロールが毎日4班から最大6班でも十分な体制で出発、貫徹されたことに象徴されるよう、まさに中央公園を仲間のオアシス（溜まり場、寄せ場）にすることに成功し、しかも、ただ溜まっているだけではなく、仲間の命を守る飯炊き、パトロールに力まず、自然に、呼びかけもせずにこぞって参加できる雰囲気と条件が確実にあり、それを根拠に、無限大の仲間のつながりを保障したと言えよう。越年闘争がスケジュール化し硬直化していた例年より、それ以上の仲間のつながりと野宿ながらも生きて行く確信や自信を明確に仲間にも与え切ることが出来た越年闘争であった。

集団野営がないと心配する向きもいたが、大量の毛布の支給により寝床の確保は各自が共同作業を通じて知りあえた仲間と解決するという作風が自ずと作られ、実質的な仲間の集団野営の場所である中央公園の占拠状態をより自然に拡大させ得た。越年以後中央公園

は最大170名近くの人口に膨れ上がり、越年前に比較して70近くが新たに入居した計算になる。運動が主体的に寝場所を提供するのではなく、そこに住む古い仲間が率先して新しい仲間にとtentや小屋を共同で作り、その関係性を維持しながら共同生活を営む中で、仲間の自己解決能力を高めて行き寝場所を運動に頼るといふ旧来の発想を大きく凌駕して来た。もし、越年で大tentでも中央公園に張っていたなら、そこに集まる仲間の生活まろがかえの運動を越年以後も余儀なくされ、越年闘争は無期限にならざるを得ない。仲間にとってそれは「楽」であるかも知れないし「理想」かも知れないが、その発想は集まった仲間の「その後」までも保障する運動の一環でなければならない。運動が選択した占拠は途中で解除できるような生易しいものではない。tentを張るならその仲間が野宿から脱せられるまで最後まで張り、それを運動の武器にして行くという事である。我々は寝場所の自己解決能力の条件はあると判断をし、また、tentを武器にする運動線上にないと判断し、寝場所問題を仲間の解決能力に任せた。そして、それは条件がありさえすれば解決出来るということも仲間が立派に証明した。越年闘争だから集団野営をするという無思想な発想は、破棄出来るということをも本越年では証明し切ったとも言えよう。

我々が本越年で勝ち得た確信は、仲間の命を守り、支える共同作業こそが、仲間の新たなつながりを作る唯一のものであるという事である。この点からすれば、作業内容以上に仲間が集まり過ぎやることが比較的少なくなってしまった点是我々は総括をすべきであろう。共同作業を作る事に関して、その意志をもつ連絡会メンバーが少なく、職人的に作業を私物化する傾向があった事も事実であり、そういう傾向は今後是正していく必要がある。与えられた事しかやらないという任務の硬直

化、自由なその場判断の発想が乏しいとせつかく作業をしに来たのにやる事がないという事にもなってしまう。全体を見る目が多く必要なのである。共同作業の条件を整える事に我々がもっと執着する必要があるだろう。

もっともその中でも評価されるべき象徴的な出来事はいくつかあった。東京駅バトでの咄嗟の判断による「なぎさ寮入寮」引率行動であるとか、中央公園における朝の焚き火であるとか、急遽の昼飯作り、バト隊への晩飯作りであるとか、仲間の自発的な散髪であるとか、4日夜の大原さんらによる仲間を交えた音楽会に代表される自由な発想による企画の数々であるとか、全体で楽しもうとか、全体で考えようとか、全体で行動しようとか、そういう発想が少ないながらも日を追うごとに芽生えて来たのはすばらしい事だと思うし、それを基準に我々のスケジュール的な無思想な発想を変えて行く必要がある。仲間と共にという確固たる発想をもった様々な方角に流れおちる岩肌の水溜をいかに大河、濁流へと組織するかである。

連日の炊き出しに関して、従前より語られていた与える側、与えられる側の壁をいかに突破し仲間の「共同鍋」により近いものにするかを久し振りに思考し直し、混乱を無くすために合理的な手法にするのではなく、混乱することを恐れず、それをも生きる力に転嫁すべく方法を連日試行錯誤した事は、実態はまだまだ仲間の炊き出しにはほど遠いながらも明らかにその方法論においては前進を遂げたと言えよう。

医療、パトロール的には今回、始めて医療班とパトロール班を体制的に分離し、その連携を追及をした。医療tentの維持、医療相談、救急搬送など、医療班独自の体制で貫徹された事は大きい。日常的な医療相談を軸にネットワークを広げて来たことの成果である。

また、越年期は環境が最悪の中で医療従事者の方など医療班に集まる支援者の方々の努力に我々は最大限の敬意を表したい。医療班の越年記録は別途の表によるが、新たな仲間の流入と悪性の風邪が流行するなど（支援者も含め）病人が大量に出るなどの厳しい条件の中で、越年期間中一人の路上死も出さなかった事は、医療班、パトロール班の連携した活動の最大の成果であると考えている。

パトロール班と医療班の連携で多少の判断の違いや、パトロール班の中でなんでも医療テントへという発想があったようであるが、熟練の度合いや当該とのつきあいの差などから万全を求める発想がもたげてきてしまった

のであろう。パトロール班の判断力の問題については医療講習会などを越冬前段に企画をしたが、その点などきめ細かい打ち合わせが越年期間中できずに、どうしても混成部隊になってしまう傾向を反省すべきであろう。初めての仲間や支援者もまわりながらミーティングや講習会ができるような体制が求められている訳であり、その点は次回以降の課題にしていきたい。医療班もどちらかと言えばテントに閉じ込めてしまった傾向もあり、もっと医療をめぐる仲間と積極的な回路を作るべきであったと反省をしている。すなわち、体制上の余裕をもっと作りだす必要があるという事である。



また医療班と取材陣とのトラブルが本越冬では発生しているが、今後画一的に取材を認めるか認めないかという問題としてではなく、取材する側と取材される側との論議が多いに必要なのではないかと考える。運動主体と取材陣は立場が違う訳で、お互いの立場からの論議を大いに行きたい。

全般的には重点地域池袋の仲間の結集を多くかちとり、それが、越年だけではなく、その後もまさに開花されようという勢いを作り出したことは率直に評価できると考える。池袋の仲間は一人は中央公園に泊まり込み、他の

仲間は早朝に新宿に来、屋からは山谷で飯炊きの作業をし、夕方からオニギリ作りを共同作業で行ない、夜は深夜までパトロールを続けると、まさに休む間もない位懸命の作業を担った。残念ながら30日夜パトロールの後に一人の仲間が亡くなるという事態があったが、その仲間の無念を乗り越えようと日夜頑張り抜いた仲間の熱意は触発される程のすばらしいものがあった。餅つき大会にも多くの仲間が参加し、新宿、池袋間の団結は以前に比して数十倍以上に広がったといえよう。

東京駅のパトロールもまた原則的にやり抜いた。

山谷越年対策の利用に関しては、過去最大の二千四百五十名の宿泊を記録し、山谷以外からの入寮も多く実現させたが、他方で利用者との意思一致が不十分で受付ではねられるという事態も発生しており、その点については今後十分な呼びかけと情報収集が必要ではないかと考える。

越年の責任体制的には活動者、当該の中心メンバーも含め、風邪で次々とダウンするという各班とも最悪の事態となってしまう、その点での体制上の混乱については反省をしている。もちろんそれで各班が機能なくなり、予定していた活動がなくなるという最悪の事態は避けられた事は不幸中の幸いと言うべきであり、無理を承知で体制をいじくり、配置替えを半ば無理やり要請してしまった支援者や仲間に多いに感謝をしている。体制上の混乱だけは今後絶対に避けて行きたい。倒れた人々の問題というよりみなぎる担い手は多くいるにもかかわらず責任体制だけは常にギリギリという連絡会体制に問題の根はあるのであり、体制の今後の強化拡大を計り克服していくつもりである。

この越年闘争でまた一段と広がった新宿の仲間の力を、我々は笑顔で2・7火災で亡く

なった仲間に報告できると信じている。

こんなにも仲間が増えたよ、こんなにも俺たちの力は大きくなったよ、

2・7火災と2・14自主退去以降の新たな新宿連絡会は、新たな運動の質をつかみ初心に返った心暖まり、仲間一人ひとりの自信につながる越年闘争をやり抜いた。亡くなった仲間の無念はここにあったのだろうと思う、共に生き、共に楽しみ、共に苦しみ、共に行動する。本当に仲間と呼べる暖かい温もりが新宿で再建された。これを基礎にあとは前に進むだけである。

(了)

春休み7日

人がいるのは 楽しいぞ

今日2日遊ばし
 新宿三環と
 馬場パトロー
 ール
 中央公園遊
 園
 池袋パトロー
 ール
 中央公園遊
 園
 池袋パトロー
 ール
 中央公園遊
 園

明日3日遊ばし
 全体練習
 11時半
 中央公園遊
 園
 共同練習
 などあります。
 5時から
 越年まとめ集
 議委員会など
 7時から
 焼き出し祝
 会
 新宿三環と
 馬場パトロー
 ール
 中央公園遊
 園
 池袋パトロー
 ール
 中央公園遊
 園

新宿連絡会
 新宿野営労働者の
 生活・経済問題をめぐる
 連絡会
 1989年1月2日
 発足
 030(3818)3450
 (電話番号が変わりました！)

もうひとつの越冬

都市の果てから…

エサとりキャラバン

木暮茂夫

鳩カラス 猫にネズミに 我らまで

一つのポリ（バケツ）に飢えてあつまり

（新宿ダンボール村住人の故ジロー氏詠む）

「都市の果てから…」というタイトルで路上写真展しながら、富山、新潟を旅した。昨年の12月、9日間ほどの旅だった。大きなダンボールの板に写真を貼り付け、「お米を下さい」と書いた小さなチラシをくっつけた。手当たりしだい、出たところ勝負の路上展示の旅だったので、反響もこじんまりしたものだったが、そのぶん新鮮な出会いと驚きに溢れていた。わけのわからぬ馬鹿な写真屋とお笑いの向きもあろう。何やってんだと呆れる方もいよう。かといってクドクド説明、解説、弁明するのも面倒くさい。やっていることは単純明快。カッコよく言えば、雪の舞いそうな北の街の辻々で、写真という芸を開陳して乞食（こっじき）してきた、というところ。

なんでそんなことを？とよく聞かれる。再び、理由は簡単で、再度カッコよく言えば「上記の歌を詠んで死んだジロー氏への義理と、路上写真展を楽しませてくれたダンボール村への人情と、写真家としての職能をもってしてのボランティア精神」ということだろうか。

残飯あさは残酷だ！！

5年前、上野公園で知り合ったおっさんに「究極のホームレスを見せてやるからついてこい」と言われて、深夜のアメ横の路地を歩いた。決まった時間になると、すし屋の横のゴミ集積所の周辺に黒い影が集まりだした。野良猫も辺りをうろついている。白衣姿の店

員がビニール袋を抱えて出てきて、再び店内にもどると、しばらくして黒い影たちが吸い寄せられるようにポリバケツに集まっていく。

「いいか、よく見とけ！こう食うんだ」おっさんは、ティッシュや煙草の吸い殻を選り分けて、刺身を摘み上げては口へと運んだ。薄暗がりの中で、彼の指先が震えているのが見えた。一緒に食ってみようかと一瞬考えて、やめた。僕には食えなかった。写真家として、どこでも、いつでも被取材者と同じ物を食べてきたつもりだったが、この時、僕には食えなかった。つらかった。

こういうと、わけ知り顔の「ホームレス評論家」たちはすぐこう言う。「あ～、それなら私は彼らと一緒に拾ったハンバーガー食べたことあるよ」「うん、結構おいしかったし、もったいないよね～」

ノテンキな馬鹿者どもめ。だったら、毎日3回、一ヶ月間食ってみろ。薬も、寝場所も、トイレも着替えも思うにならない状態で、下痢をしながら食ってみろ。一緒に食って、一緒に下痢もしたことない奴がエラソーなこというな（自慢だが、僕は3回下痢をした）。

職業柄、欧米のホームレスや第三世界の難民キャンプを訪れる機会が過去に何度かあった。でも、どこの国でも「残飯あさり」で食料を調達している人はそう多くない。欧米ではシェルターの配給や食券があり、第三世界では国連や豊かな自然から調達するか死ぬかだからだ。「残飯あさり」が成立するには、沢山の富者の近くに極貧者がいて、しかも援助や自然条件が完璧に欠如していることが条件のようだ。そして日本では「残飯あさり」は当然のことと受け入れられて「拾って食える豊かな国」と理解され、「ホームレスも糖尿病」とお笑い話になる。

その一方であおかんたちは、ひそやかに自嘲する。それらは「メシ」ではなくて「エサ」なのだよと。

だから、なにはともあれ、緊急対策としての炊き出しは、もっとしっかりあっていい。その為には、支援、ボランティアグループが困るほどの沢山の米や食材が先ずあっていい。

なにしろ、彼らは、カラスやネコやネズミじゃない、人間なのだから。

「エサとりキャラバン」は本年11月から12月にかけて、東北、北陸方面で幅広く展開したいと考えています。

幅広い皆様の御支援、御協力を切望いたします。

エサとりキャラバン連絡先

090-3908-8320 (こぐれ)

追悼-2・7西口地下広場被災一周忌

こんなにも俺たちは

共に

1998年 年末

北風を越え行こう

雪が降るよ!

中央公園 新宿の仲間

仲間たち！
あの惨劇：新宿駅西口地下広場の火災事故からまるまる一年となる。この一年、俺たちはあの事故で亡くなったかけがえのない4名の仲間の分まで生き抜こうと決意をし必死の思いで頑張ってきた。確かに西口の地下には今はダンボール村はない。俺たちは自主退去を決め、当時残っていた仲間は自立支援暫定センターに多くが移住し、それぞれの人生を歩み始めた。あの当時の仲間が全員新宿にいた訳ではない。が、あの西口地下広場にいた仲間が亡くなった仲間と共に暮らしたダンボール村を忘れた訳じゃ決してない。二・七から出発した新たな歩みを誰一人として忘れてはいない。

一周忌に当たって俺たちは亡くなった仲間
に笑顔で報告する。俺たちはこんなにも仲間
が増えたよ、俺たちの歩みはこんなにも大き
くなったよ、と...
仲間達にとつては感傷にひたる余裕などない
一段と冷え込みのきつい路上で毎日を送る。
仲間達にとつては感傷にひたる余裕などない
一段と冷え込みのきつい路上で毎日を送る。
仲間達にとつては感傷にひたる余裕などない
一段と冷え込みのきつい路上で毎日を送る。

- 今週のスケジュール
- 8日(月) 福祉行動 朝8時半「新宿の目」朝9時区役所前 豊島区交差 11時半新宿区役所前 12時中池袋公園集合
 - 9日(火) 福祉行動 朝9時区役所2階
 - 10日(水) 馬場パトロール 夕6時「新宿の目」池袋寄り合い 夜7時中池袋公園
 - 12日(金) 東京駅寄り合い 夜6時半「新宿の目」夜7時常盤橋公園
 - 13日(土) さくら寮面会行動 1時さくら寮前
 - 14日(日) 炊き出し準備行動 朝11時「新宿の目」

13日(金) 炊き出し
15日(日) 新宿の目
17日(火) 池袋寄り合い

- 今週のスケジュール
- 1日(日) 福祉行動 朝8時半「新宿の目」朝9時区役所前 11時池袋寄り合い 12時中池袋公園集合
 - 2日(月) 馬場パトロール 夕6時「新宿の目」池袋寄り合い 夜7時中池袋公園
 - 3日(火) 東京駅寄り合い 夜6時半「新宿の目」夜7時常盤橋公園
 - 4日(水) さくら寮面会行動 1時さくら寮前
 - 5日(木) 炊き出し準備行動 朝11時「新宿の目」

新宿の街 星は見える
ねらでも星は見える

心だけは氷にならぬ

冬は味に王様

新宿連絡会
新宿野営労働者の生活・就労問題を求める連絡会
090(3818)3450

- 今週のスケジュール
- 10日(水) 福祉行動 朝8時半「新宿の目」朝9時区役所前 11時半新宿区役所前 12時中池袋公園集合
 - 11日(木) 馬場パトロール 夕6時「新宿の目」池袋寄り合い 夜7時中池袋公園
 - 12日(金) 東京駅寄り合い 夜6時半「新宿の目」夜7時常盤橋公園
 - 13日(土) さくら寮面会行動 1時さくら寮前
 - 14日(日) 炊き出し準備行動 朝11時「新宿の目」

旅路からの

報告

2・7一周忌を終えて…

笠井和明

ながい、ながい、闇夜からやっと抜け出した思いで2月7日、朝5時を迎えた。黒焦げになったあの日のインフォメをクリーム色のフェンスが覆い隠す。誰一人通らない地下広場の耿々としたあかりがやけに眩しい。フェンスに花を添え腰を下ろしてようやく気が付く、一年ぶりにこの路上に座ったのだなと。

ここに生きてきた日々を懐かしく思う。ここで共に生き、死んで行った仲間の顔を一人ひとり思い浮かべる。出来るだけ笑った顔を思い浮かべようとする。

酒好きの3人の男とコーラ好きの一人の女に供え物をし、ひっそり乾杯しながら自分のワンカップに口をつける。溜め息と共にこの一年の思いが体から抜けて行く。

一年、死ぬ気で走り抜けようと思っていた。それが自分に出来る唯一のことだと思っていた。死んでしまった仲間や生き残った仲間のためにも、そして自分のためにも。2月8日のカレンダーは頭の中にはなかった。どんな顔でこの一年を報告出来るのかと、そればかりを気にしていた。

もちろんこの一年うまく行った訳じゃない。具体的な果実が目の前にある訳じゃない。酒

量も増え、怒りっぽくなり、やがて人と話すのも苦しくなっていた。朝を迎えるのが次第に圧迫を覚えるようになった。またあの日のよう泣きじゃくるのだろうなと自分でも嫌になった。だからそうならないようにと、前の晩から友を引き連れ新宿で飲み明かした。

涙を無理にこらえた訳ではない。その日が来、灼熱地獄が襲った時間に、その場に一番近い路上に二人でひっそりと腰をおろし、そして、手を合わせていると、不思議にまた一年どうにかこうにかやって見ようと、妙にすがすがしくそう思えた。

ここに生きて来た事を忘れない。

僕らに出来るのはただ、それだけなのだろう。

「仕方がないよ、済んでしまったことは」

前日グチをこぼしていた時にある仲間から言われた言葉を繰り返す。取り返しのない事を繰り返しながら、それでも人は生きていかなければならない。仕方はなくはなかったと思いたい。だけど、やはり、仕方がないのだ。済んでしまったことは。だから、忘れてしまう事で浄化させるのではなく、忘れないことで悩み、苦しみ、のたうち回り、叫び、慟哭しながら生きていかななくてはならない。

やがて早朝のパトロールを終えた数人が合流し、昔のような話し声が路上からざわめき立ち、まばらな通行人の足音がコツコツと響き始める。いつもの新宿にこの場所も次第に包みこまれる。人が幾重にも重なり、何も調和をしないいつもの新宿の街角に。

越冬前段の取り組み (日常定例活動は除く)

- 11月2日 新宿区生活福祉課との団体交渉
 26日 全都越冬闘争突入集会 恵比寿区民館 250名
 27日 1・24裁判控訴審判決公判傍聴行動
 29日 第5回新宿越年・越冬闘争突入宣言集会
 12月1日 東京都衛生局との代表交渉
 3日 声の教育社労働争議共闘
 13日 医療相談会 毛布配給250枚
 16日 池袋寄り合い
 17日 北部共闘集中闘争共闘参加 東京駅寄り合い
 18日 さくら寮入寮全都行動
 19日 さくら寮面会激励行動開始
 20日 毛布配給250枚
 22日 戸山公園一斉清掃監視行動
 23日 新宿越年越冬闘争支援連帯集会 100名
 25日 撤去をやめろ! 都庁緊急抗議デモ 120名

- 大会、乾杯、紅白上映、新宿、馬場パトロール、池袋パトロール、新春宴会、ざこ寝、深夜パト、昼食炊事、飯炊き部隊出発、共同炊事(もつ煮込)、寅さん上映、炊き出し700枚、木枯らし紋次郎上映、新宿、馬場パトロール、池袋パトロール
 2日 深夜パト、昼食炊事、飯炊き部隊出発、共同炊事(野菜いため)、餅つき大会、さすらい姉妹路上劇上演、ジュラシックパーク上映、炊き出し700枚、新宿、馬場パトロール、池袋パトロール、東京駅パトロール
 3日 深夜パト、昼食炊事、飯炊き部隊出発、共同炊事(カレー)、1・24ビデオ上映、大原さんバイオリン演奏、炊き出し700枚、医療相談会、新宿、馬場パトロール、池袋パトロール
 4日 福祉行動、撤収作業、打ち上げ

越冬後段の取り組み (日常定例活動は除く)

越年闘争 (新宿区中央公園ポケットパークを拠点にして)

- 27日 夕5時突入設営、突入宣言集会、炊き出し600枚、新宿、馬場パトロール
 28日 都庁前情宣、福祉行動、飯炊き部隊出発、テント設営、笑点などビデオ上映、炊き出し700枚、新宿、馬場パトロール、東京駅パトロール(なぎさ入寮行動)
 29日 深夜パト、スポ健引率、飯炊き部隊出発、共同炊事(カレー)、李政美さんなどライブ、炊き出し700枚、新宿、馬場パトロール
 30日 深夜パト、飯炊き部隊出発、共同炊事(シチュー)失業園上映(中断)、炊き出し700枚、医療相談会、新宿、馬場パトロール、池袋パトロール、東京駅パトロール
 31日 深夜パト、スポ健引率、昼食炊事、飯炊き部隊出発、共同炊事(肉じゃが)、失業園上映(続き)、梅津さんサックス演奏、炊き出し700枚、カラオケ

- 1月5日 福祉行動
 6日 福祉行動、池袋寄り合い
 7日 東京駅寄り合い
 13日 なぎさ寮入寮全都行動
 15日 日雇全協全国集会デモ 玉姫公園 350名
 17日 医療相談会
 22日 なぎさ寮面会激励行動開始
 23日 麻企面談
 24日 毛布配給250枚
 27日 なぎさ寮入寮行動
 29日 ふじせ労組争議共闘参加
 31日 毛布配給250枚
 2月1日 1・13裁判控訴審判決公判傍聴行動
 4日 全都実統一行動 台東区交渉85名
 7日 2・7一周忌追悼行動
 8日 全都実統一行動 豊島区交渉80名
 10日 池袋寄り合い
 12日 東京駅寄り合い
 21日 毛布配給250枚

多くの越冬カンパどもありがとうございました

暖かい支援に支えられ、無事越冬の取り組みを終了させる事が出来そうです。引き続き支援カンパ、通信購読拡大を宜しくお願いいたします。(事務局一同)

会計報告(98年11月~99年1月)

収入	郵便振替カンパ	122口	1,946,700
	通信会員費	47口	235,000
	通信売上		24,750
	個人、団体カンパ		2,338,357
	越冬準備金		854,000
	山谷より米代貸し付け金返済		480,101
	計		5,878,908
	前期繰越金		637,820
			6,516,728

支出	炊事関連費	1,175,312
	交通費	591,930
	印刷代	88,691
	文具図書費	14,518
	発送費	74,800
	車両関連費	76,439
	電話代	43,027
	会費、使用料など	77,750
	雑費	16,986
	全都実分担金	26,757
	レンタル代	90,720
	薬医療関連	142,242
	毛布	787,831
	備品	99,253
	礼金	50,000
	裁判費用	1,000,000
	計	4,356,256
	貸し付け金	401,848
	次期繰越金	1,758,624
		6,516,728

編集・発行 新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議(新宿連絡会)
 連絡先 東京都台東区日本堤1-25-11 山谷労働者福祉会館気付け
 郵便振替口座 00170-1-723682「新宿連絡会」
 電話 03-3876-7073 090-3818-3450
 FAX 03-3876-1869